



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

Practice of Excursion in the Area Around Kawasaki Station and the Effects and Issues of Using Video Cameras (Practice Records)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牛垣,雄矢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173806

川崎駅周辺地域における巡検の実践および ビデオカメラで撮影した動画活用の効果と課題

牛垣 雄矢*

キーワード：エクスカーション，野外実習，新型コロナウイルス，オンライン授業，川崎市

I はじめに

2020年1月以降、世界中で新型コロナウイルス感染症拡大への対応に追われ、教育現場にも大きな影響をもたらしている。コロナ禍での授業実践のあり方やその可能性については早くから議論があり、日本地理教育学会では2020年5月16日に「withコロナ，postコロナにおける地理教育のあり方オンライン交流会」が開催され、その成果は機関誌『新地理』の第68巻2号（2020年8月号）に掲載された。本誌でも守谷ほか（2020）の実践が報告された。経済活動を始めとした様々な人間活動を行いつつながらの感染症対策となる以上、効果的なワクチンが開発され世界中の人々に行き渡るまでは、もしくは多くの人の体内にウイルスの抗体ができるまではこの終息は期待できず、教育界においても、今後数年間はオンライン授業の実施などコロナ禍への対応が求められる可能性が高い。

地理学や地理教育の分野において重要視してきた野外実習の一つである巡検（エクスカーション）も、屋外の活動ではあっても参加者が密集するため、その実施の可否などが問われている。報告者の勤務校である東京学芸大学の社会科地理学教室では、例年、主に2年生対象の授業「地域調査法」において、4人の教員がそ

れぞれ半日から1日かけて巡検を行ってきた。2020年度は、最後まで開催の可能性を探ったが、学期末に迫る7～9月にも東京都内で感染者が増加したため、対面での巡検の実施は断念せざるを得なかった。

著者は対面での巡検の代替として、教員自らがビデオカメラをもち、実際の巡検時における説明ポイントで景観や資料を撮影しながら解説をした。この動画を大学関係者が利用できるマイクロソフト社のStreamへアップロードし、学生はそれを視聴しながら地図や資料をみて、メモをとり、最後にレポートを提出する、という学習方法を採用した。

この方法を採用した意図は、少しでも現地の様子や巡検の雰囲気を感じてもらいたい、という点にあるが、この方法は、コロナ禍という点に限らず他の効果も期待できる。従来から井田（2000）などが指摘している通り、巡検などの野外実習は、小学校から大学にかけての社会科および地理教育において有効性が認められている。しかし、準備や実施に時間を要することや不足する授業時間、安全性への配慮やそれに対する学校や保護者からの理解、担当教員の能力的な問題などにより、実施できない場合も多いことが、池（2012）などによって指摘されてきた。その中で今回の方法は、野外実習を実践し

* 東京学芸大学教育学部

たたくてもできない場合の代替手段の一つとして有効と考えられる。

巡検の対象地域としたのは、川崎市幸区・川崎区のうち、JR 矢向駅付近からJR 川崎駅付近にかけての帯（本稿では「川崎駅周辺地域」とする）であり、テーマは「工業都市・川崎の変容—その光と影—」である。川崎市は、かつては京浜工業地帯の一角を担う工業都市として、近年では東京に近接することにより生産年齢人口やその子ども世代が増えている地域、また工場から研究所への転換がみられる地域として、中学・高等学校の地理の教科書でも記されてきた。かつては工業都市として、今日は人口の受け皿となるマンションが多い都市として、明確な特徴を有しており、それらは地域の様々な側面に影響をもたらしている。工業都市からマンション街へという地域の変容と、それに伴う様々な要素やその関係性の変化といった地域構造とその変化が明確にみえる地域であり、地域の特徴や事象間の関係性を把握する地理学においては、対象として適当な地域といえる（牛垣, 2016a）。その中でも今回、巡検の対象とした地区は、川崎市において中核的な役割を担うJR川崎駅に近接し、川崎市における地理的特徴やその変化が象徴的にみられる。そのため数時間という限られた時間内でも、川崎という地域の地理的特徴や構造およびその変化について、体験を通じて学ぶことができる。

なお、先述の通り巡検などの野外実習が実践されない背景の一つに、教員にそのノウハウがないことがあげられ、そのために研修を求める人やノウハウの共有を求める人が多いことが指摘されている（高木, 2021）。著者は以前にも東京の神田を事例に巡検の実践例を報告したが（牛垣, 2016b）、このように巡検の事例を提示することにも一定の意義があると考えられる。

そこで本稿では、川崎駅周辺地域を対象とし

た巡検から修得できる地理的知識や地理的見方・考え方を具体的に示すとともに、ビデオカメラで撮影した動画を用いた巡検の有効性と課題について考察する。

なお、巡検の内容をまとめた本稿における川崎市の説明は、著者のこれまでの成果による部分が多い。牛垣（2018）や牛垣（2020）においては、多くの写真や地図をカラーで掲載しているため、これらで掲載している写真や地図は基本的には再掲しない。もし興味があればこれらの記事も参照していただきたい。

II 巡検および動画撮影に向けての準備と動画のアップロード

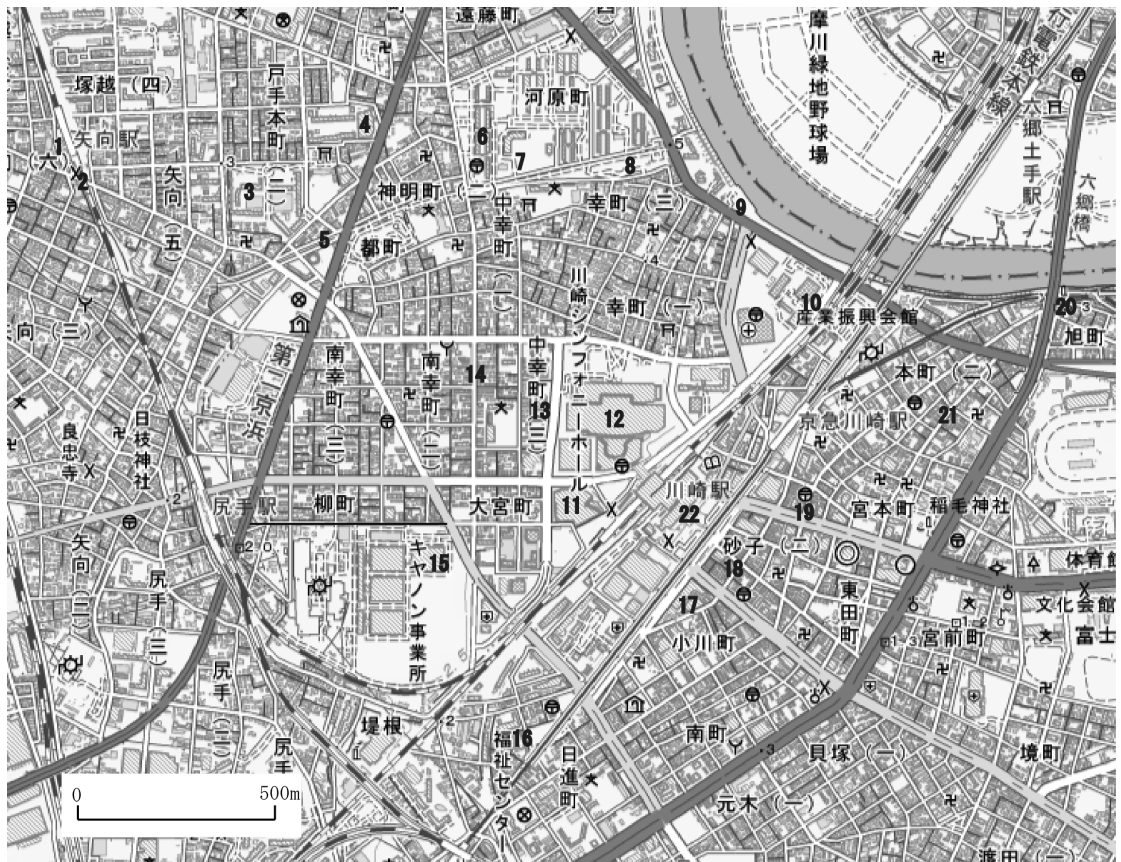
この授業では、場所を定位するためのベースマップには、下記2000年代の1万分の1地形図を用いたが、同地形図は記載されている情報が古いため、都市部の巡検でのベースマップには地理院地図の方が適している場合もある。特に動画を視聴する今回の試みでは、全てパソコン上での作業となるため、地理院地図は便利である。スケールは大縮尺な方から3番目が丁度よい。これに調査ポイントを示したのが第1図である。

学生には、対面の場合は紙ベースで配布している地図や資料をPDFやwordファイルで配布した。配布したのは、チェックポイントの地点名が記されたメモ用のwordファイル、1万分の1地形図「鶴見」（2007年発行）と同「川崎」（2001年発行）をつなぎ合わせた地図①のPDFファイル（第2図）、『都市地図 神奈川県2 川崎市』（昭文社）のうち「川崎市東部」（1/16,000）および「幸区役所」（1/8,000；いずれも2016年発行）の地図②のPDFファイル、『都市地図 神奈川県2 川崎市』（昭文社）のうち「川崎中心図」（1/5,000；2016年発行）の

地図③のPDFファイル，1万分の1地形図「矢口」（1958年発行）と同「鶴見」（1954年発行）をつなぎ合わせた地図④のPDFファイル，迅速測図 神奈川県武蔵国橘樹郡川崎駅（1/20,000；1881年発行）の地図⑤のPDFファイル，これに各種文献に掲載された図表や空中写真（1975年撮影），写真等の関連資料を掲載した4頁分のPDFファイルである。

都市地域で巡検を行う場合，現在地を定位するためのベースマップにどの地図を使用するかは，悩ましい問題である。かつてであれば，6色刷りで河川や緑地等も判断しやすく，主な施設名が明記され，店舗の分布が把握できる1万分の1地形図が使いやすかったが，これは更新さ

れなくなったため，記載される情報が年々古くなっていく。2万5千分の1地形図は，内容は定期的に更新されるものの，都市地域の巡検としては小縮尺過ぎて，施設名の記載などが不十分である。昭文社発行の都市地図は，最新の状況が比較的詳細に描かれているが，行政区ごとに地図が分かれているため，今回のように行政区をまたぐ巡検の場合は使いづらい。今回の対象地域の前半は横浜市鶴見区と川崎市幸区の境界線付近に位置するが，使用したのは川崎市の都市地図であり，横浜市鶴見区の部分は地図には表示されないため，地域の全体像が分かりづらい。このように地図にはそれぞれ長短があるため，状況に応じて使い分ける必要がある。



第1図 地理院地図でみる川崎駅周辺における巡検の説明ポイント

図中の番号は説明ポイントと巡検の順路を意味する。

資料：地理院地図。

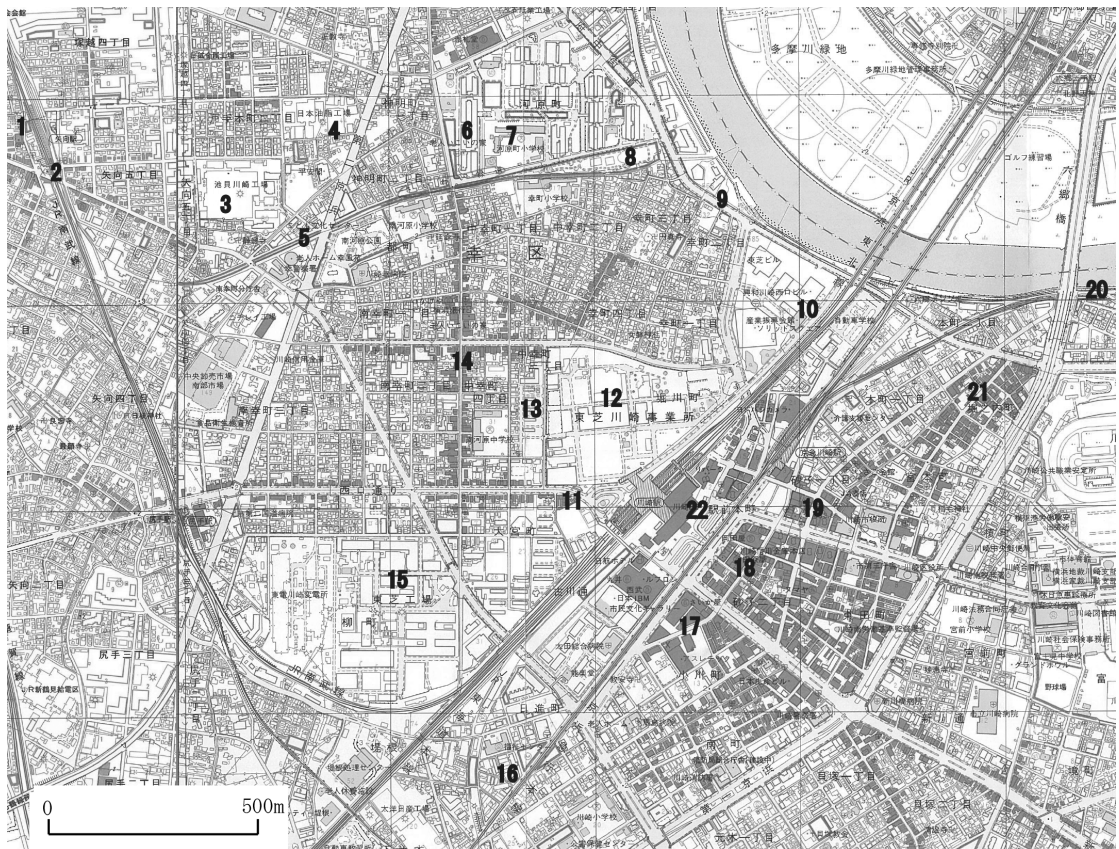
撮影に使用したビデオカメラは、Canon HD ivlvs HF21で、多くの家庭でも所有する一般的なビデオカメラである。動画は全部で31のファイルで計2時間31分である。撮影前から、撮影は長時間に及ぶと予想されたため、一度に撮影をすることを念頭におきバッテリーは2つ持参した。今回の対象地域は、著者の自宅に近いので、移動には全て自転車を使用した。資料を説明する場面では、説明する資料を置くための台が必要となるが、今回は自転車の荷台を利用した。

上記のビデオカメラで撮影した動画のファイルは、mts形式である。報告者の勤務校である東京学芸大学においては、遠隔授業はマイクロ

ソフト社のシステムを利用する機会が多いため、本学教員と学生が使用できるOffice365のStream上に上記の動画ファイルをアップロードした。この動画にアクセスするURLを、eラーニングシステムwebclass上で示し、学生はこれをクリックして動画にアクセスして視聴した。

Ⅲ 川崎駅周辺における巡検の主な説明ポイントと学習内容

第1図と第2図の地図中の番号1のJR矢向駅前の公園では、巡検のテーマである「工業都市・川崎の変容—その光と影—」の趣旨を説明した。川崎は国内屈指の工業都市として工場が



第2図 1万分の1地形図でみる川崎駅周辺における巡検の説明ポイント

図中の番号は説明ポイントと巡検の順路を意味する。

資料：1万分の1地形図「鶴見」(2007年発行)、「川崎」(2001年発行)、原寸から54%縮小。

数多く立地したが、現在では人口増加が顕著であり、景観としてはマンションが数多く立地することに表れている。工場が安い労働力や土地を求めて海外や国内の地方へ移転することは高等学校までの地理の学習で学ぶために、工場移転の背景について学生たちに問うてもよい。移転した工場の跡地にはマンションのほか研究所やオフィスが立地する場合が多い。現在の川崎市は、工業都市時代のかつての特徴とこれらの新しい特徴が混在しており、この巡検ではそれを景観や人々の様子、また地図等から読み取りたい。工場跡地にマンションが立地した事例として、北の方向にみえるザ・ミレナリータワーズは総戸数700戸程度の大規模マンションであり、これを学区とする川崎市立古川小学校は児童数1,000名を超過す。牛垣（2018）にも掲載した1950年代の1万分の1地形図（地図④）をみると、この場所には新古川鑄造工場と日本内燃機工場がみられる。一方で、JR南武線の線路を挟んでこのマンションの向いにはキャノンの研究所をみる事ができるが、上記地図④をみると、当時は富士通信機工場などがみられる。番号2の矢向駅近くの歩道橋では、これらのマンションや研究所、またさらに北の方向には同じく工場跡地に立地するJR鹿島田駅周辺の高層ビル群をみる事ができ（牛垣，2020）、写真の撮影ポイントとしてよい。

番号3は、マンション・オーチャードプラザとオーベルグランディオである。2000年代の1万分の1地形図（第2図）をみると、ここは池貝川崎工場が立地しており、その跡地にマンションが立地していることが分かる。実際に大規模マンションの敷地内であるこの場所で、改めて1950年代の地図（地図④）をみると、当時は多くの工場が立地していたことが改めて理解できる。そして工場とマンションという新旧の川崎における全く異質な要素が、時間軸でみ

ると因果関係としてつながっていることが分かる。近年は超高層マンションが立地し鉄道交通の利便性から住宅地として人気の高い武蔵小杉は、同様の現象が顕著に生じた場所と理解できる。そのため武蔵小杉駅周辺では、待機児童の増加、ビル風や日照時間の短縮、鉄道駅の混雑といったことが問題となっている。ではなぜ、以前は駅前に工場が立地したのか。現在のようにモータリゼーションが進む以前、陸上での物資の輸送手段は鉄道が主流であり、効率的に原料を運ぶためにも工場は駅前へ立地する必要があった。これが、モータリゼーションの進展や輸送する物資の重量が軽くなり、陸上での主な輸送手段が鉄道から自動車へと変わると、駅前に工場が立地する優位性は失われた。教科書では、工場の移転は安い労働力などで説明されるが、国内の交通事情の変化も背景にあると考えられる。工場がなくなると、駅前には巨大な空地ができることになる。多数の地権者がいる場合、大規模な開発は土地取得のための調整に時間と費用がかかり困難となる場合も多いが、工場跡地では広い土地を少数の人や企業がもつ場合が多く、その点においても大規模開発を進めやすい。

番号4は、日本油脂工場跡に立地した商業施設ドン・キホーテとマンションである。

番号5は、緑道に位置するが、1950年代の地形図（地図④）では、ここには矢向駅から東京製綱川崎工場へ伸びる貨物線路がみられる。工場で作られる製品の原料のほか、多摩川の砂利が運ばれたという。第二次世界大戦前（以後、「戦前」や「戦後」とする）から砂利は鉄道線路のレールと枕木を支える道床バラスやコンクリートの原料など、様々なものに使われたという。戦前・戦後期の旧版地形図をみると、南武線には同様の目的で川崎市の宿河原においても多摩川へ伸びる貨物線路がみられる。南武線は

元々1919年に「多摩川砂利鉄道」の名称で敷設計画が始まっており、その役割が地図から読み取れる。川崎が工業都市であったことは、児童は副読本などで学ぶが、現在では工場はかなり減少しているため、工業都市であったことを景観から理解するのは難しいが、この緑道がその数少ない痕跡といえる。番号5の位置にも「旧南武鉄道貨物線軌道跡の碑」がある。番号5のやや西側には、広場を囲う低い壁にかつての川崎河岸駅と貨物蒸気機関車の絵が残されている(第3図)。この絵は、周辺の居住者にもその存在がほとんど認知されていないものの、これもかつて工業都市であったことの数少ない痕跡の一つであり、地域学習の際の教材として活用できる。貨物線路や工場は、基本的には地域住民とは関わりがなく、ばい煙や騒音・振動を発生させるために、住民目線では迷惑施設といえ、これが敷設されていた頃はまさにものづくりのための空間であったといえる。今日では、工場の跡地には人が住むためのマンションや生活するための商業施設が立地し、貨物線路の跡地には生活を支える公園や生活空間をつなげるための緑道ができることで、人が住むための生活空間へと変化している。工業都市の変化、ということは、単に工場が減っただけでなく、工場の減少に伴って地域構造がドラス

ティックに変化したことを意味する。地理的な地域の見方としては、単に特定の要素の増減や変化のみならず、要素間の関係性やその変化から、地域を構造的にとらえてその変化を理解する必要がある。

次に向かう河原町団地との間には、1938(昭和13)年創立の川崎市立南河原小学校がある。ここの校歌には「煙たち 鉄の塔たつ大空に 希望の瞳輝かし」という工業都市を肯定的にとらえる歌詞がある。一方、川崎市は工業化の進展とともに公害に苦しんだ歴史があり、小学校での地域学習でもしっかりと取り上げられる。工業化は、経済的にはプラスの効果をもたらしたが、環境や健康面ではマイナスの影響をもたらし、後者の影響が軽視された結果生じた現象が公害である。このようなことを今後起こさないためにも、当初は工業化が歓迎され進められた理由であるそのプラス面の影響についても学ぶ必要がある、その際にはこの校歌も活用できると考えられる。

番号6は、13棟の建物からなる河原町団地である。先述の通り、かつては東京製綱川崎工場が立地したが、これが茨城県土浦市へ移転すると、1975年にこの団地が完成した。完成当時はいわゆる団塊の世代が多く住み、築45年以上となった現在では高齢化が進んでいる。13~15号棟は分譲であり、団地の1階にはスーパーなどの店舗が入り、かつては本屋・パン屋・米屋・寿司屋など最寄り品や子ども向けの店舗も入居したが、現在ではこれらの業種の店舗はなくなり、住民の高齢化に合わせるように眼科や耳鼻科など高齢者向けの施設が増えている。

河原町団地の上層階から北西方面を眺めると、一定の間隔をあけて所々にマンションを中心とした高層ビル群がみられる(牛垣, 2018)。番号1と3で説明した通り、これらの多くは工場跡地に立地している。日本地誌研究所

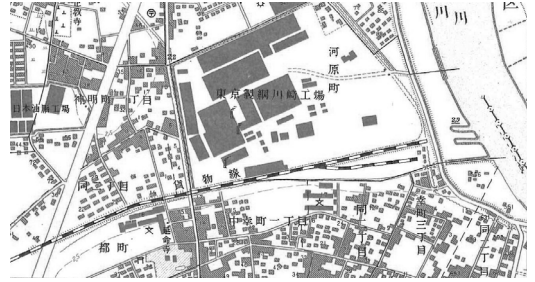


第3図 旧南武鉄道貨物線軌道跡に造られた広場の壁面にみられる川崎河岸駅の絵 (2021年9月撮影)

(1968)で示されている1963年の川崎市における工場の分布をみると、工場は臨海部のほか、川崎駅、鹿島田駅、小向、小杉駅、溝の口駅の辺りに集積しており、高層ビル群が一定の間隔で所々にみられる現在の川崎市の景観は、かつての工場立地の影響であることが分かる。このように工場やマンションの分布傾向に特徴があり、その背景を考察することは、最新の中学や高等学校の学習指導要領で示される地理的見方・考え方の「位置や分布」にあたる。

番号7には、今は特別養護老人ホームのクロスハート幸・川崎が立地するが、団地ができた当初は子どもが多かったため、その子どもたちが通う河原町小学校が立地しており（第2図）、ここでも団地の高齢化に対応した施設の変化がみられる。なお、川崎市では、これまでみてきたように新築マンションが多く建設されているために、生産年齢人口やその子ども世代が多いが、この団地でみられるように、局地的には高齢化が進む場所もある。居住者の年齢層は川崎市内で一律ではなく場所によって異なり、また川崎市全体でみた場合と局地的にみた場合とで異なる場合もある。居住者の年齢層をとらえる際には、市町村単位か町丁目単位かで傾向が異なる場合があり、地理学では適切な空間スケールで現象をとらえることが重要である。

番号8は、番号5の緑道の先にある公園で、貨物線路があった頃は先述の川崎河岸駅が置かれた場所である。1950年代の地図④では、このすぐ東側には多摩川があり、船着き場を表す2本の引き込み線がみられる（第4図）。当時の多摩川は舟運としても利用されていたことが分かる。以前から南武線の旅客駅としてのターミナルは現在のJR川崎駅であったのに対して、貨物駅のターミナルはこの川崎河岸駅であり、ここから船に積み替えられ、京浜工業地帯に輸送されたという（風巻、1998）。



第4図 南武鉄道貨物線の軌道と多摩川の船着き場
資料：1万分の1地形図「矢口」（1958年発行）、原寸から63%縮小。

その船着き場があった多摩川の河川敷には、戦後から在日朝鮮人が集住した（新井ほか、2007）。1975年の空中写真からは、河川敷にも関わらずバラックとみられるカラフルな屋根が多くみられる。川崎市には、植民地としていた朝鮮半島から半強制的に移住させられた人々の集落が戦前から形成され、彼らは主に工場や砂利採取のための労働力を担った。戦後、彼ら・彼女らやその二世、三世は進学や就職の機会などで差別的な扱いを受け、それを撤廃する運動を展開するが、当初は市の行政や教育委員会からは受け止められなかった。そのような中、工業化が進み公害問題が顕在化した川崎市において、工業立地よりも公害対策を打ち出して革新市長と呼ばれた伊藤三郎氏が市長になると、行政や教育委員会の体質も変化し、在日朝鮮人の人々の訴えに耳を傾けるようになった（金、2007）。近年では、市営住宅入居資格における国籍条項の撤廃、児童手当の支給を国の法改正前に行うなど、川崎方式と呼ばれる先駆的施策がとられた（川崎市、1997）。また市内に住む外国人が集まり生活を送るうえでの問題を話し合い市政に反映させるための「外国人市民代表者会議」や、川崎区桜本地区のふれあい館において地域の小学生と地域住民が交流するイベントが、教科書『小学社会6下』（教育出版、2012年発行）の中で、多文化共生社会を目指した取

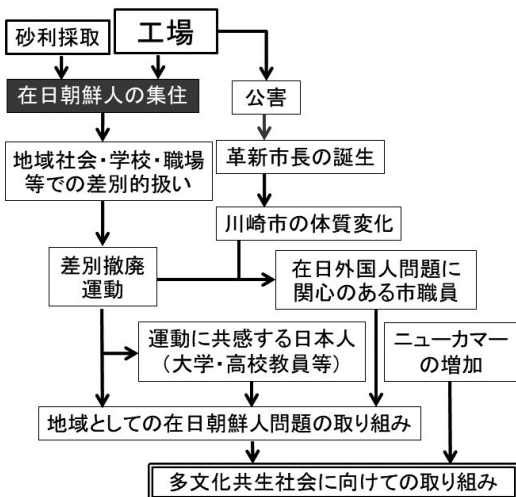
り組みとして掲載された。多文化共生社会に向けての取り組みが盛んなことや工場といった要素は、川崎市の特徴の一つであるが、全く異なる要素に見える両者が、時間軸で因果関係を見ると、在日朝鮮人や公害対策といった点で結びついているのも面白い(第5図)。ただし、多文化共生社会を目指した取り組みが進んでいるとはいえ、差別問題が解決したわけではない。最近でも、在日外国人に対して差別的な発言を繰り返す「ヘイトスピーチ」が川崎区を中心に盛んに行われ、川崎市ではいち早くこれらの行為に対する罰則付きの条例を制定した。これも上記の多文化共生社会に向けた取り組みの一つといえる。川崎市全体としては新築マンションが増え、従来の住民とは異なる社会層の新住民も増えている。様々な人々が集まる都市として、どのように共生社会を構築するかが注目される。このような差別や共生といった問題も、地域的な特徴が反映されるため、地域的な枠組みでとらえる必要がある。

番号10に向かう途中、京浜東北線の鉄橋に

近い多摩川河川敷には、いくつかのブルーシートがみられる。川崎市は、全国の中でもホームレスが多いといわれており、その原因は河川敷や後述する簡易宿泊所があることも背景と考えられている。そのため川崎市は、ホームレスの自立支援にも積極的であり、近年はその人数は減少傾向にある(川崎市, 2019)。

番号10の付近には、川崎市産業振興会館のほか複数のオフィスビルが立地する。この会館の前には「工業都市川崎発祥の地」の碑が立っている。1907(明治40)年に明治製糖川崎工場が建設された地で、川崎市における近代工業化の先駆けとなった場所である。その後1912年に当時の川崎町長は工場誘致を100年の町是とすると発表した。地理の教科書では、工業立地の背景は原料や消費地との間の輸送費や労働者の賃金で説明されるが、キーパーソンによる働きかけが大きく影響することもある。明治10年代の迅速測図(地図⑤)でみられるように、川崎は東海道の宿場町を除くと田畑が広がり、当時の住民の生業は農業であったため、工場が立地してそこに勤めることで現金収入が入ったことは、当時のまちの人々からも歓迎されたといわれている。工場がまちの発展の象徴であったことは、先述の小学校の校歌からも読み取れる。

番号11には、複合施設であるミュージア川崎が立地する。日本最大級というパイプオルガンを有する音楽ホールのほか、商業施設やオフィスが入る。川崎市は、かつての工場の集積やそれに伴う公害によって、大気汚染が改善された2000年代に入っても地域に対するイメージが悪く、これを改善するために「音楽のまち かわさき」をコンセプトとする政策を行っており、ミュージア川崎はそのための中核的な施設として位置づけられている。フランチャイズ契約を結ぶ東京交響楽団がコンサートや練習で使用するほか、地域の住民や子どもたちによる合奏や合



第5図 川崎市における在日朝鮮人の集住から多文化共生社会へ向けた取り組みが展開されるまでのプロセス

唱イベント等でも使われている。音楽のまちとするための取り組みには、このほかにもアーティストに対して場所と時間を限定して路上ライブを認めることも進めており、川崎駅東口やミュージア川崎ではミュージシャンや大道芸人による活動が頻繁にみられる（牛垣，2008；佐野・牛垣，2009）。

番号12には、国内のショッピングセンター（以下SCとする）の売り上げで1・2位を誇るラゾーナ川崎プラザが立地する。売り上げが高い背景には、JR 東日本管内でも屈指の乗降客数を誇るJR 川崎駅に隣接することがあげられる。2000年代の1万分の1地形図（第2図）をみても分かる通り、このSCは東芝の工場跡地に立地しており、乗降客数の多い鉄道駅近くに大規模な土地を取得できた理由もここにある（牛垣，2020）。なお、このSCの核テナントの一つに赤ちゃん本舗があり、館内にはオムツを交換するための休憩室が複数ある。またCOACHなど中高級品を扱うブランド店も入居している。周辺には部屋によっては分譲価格が1億円近くに及ぶマンションが立地し、比較的若い家族が多く、周辺地域の住民特性に合わせてSCが構成されている。

番号13は、クレセントタワーとサンクタスタワーの2棟のタワーマンションであり、中には2016年時点の中古分譲価格で9,680万円に及ぶ部屋もある高級マンションである。ここに住むのは相応の富裕層と考えられる。一方、ここには以前は低賃料のアパートが立地しており、ジェントリフィケーションともいえる居住者層の変化がみられる。かつての川崎市の南部は工業都市であり、いわゆる「ブルーカラー」のまちであったため比較的学力も低いといわれてきたが、近年ではいわゆるホワイトカラー層が増えており、学力の高い子どもも増えたと考えられる。著者も川崎市南部の公立小中学校の出身

であり、当時よりは授業態度が改善されているかと考えたが、ある川崎市立中学校出身の教諭によると、近年の状況は必ずしも改善されていないという。著者が中学生の頃のように全体的に学力が低い状況であれば、学力の低い生徒がマジョリティーであり、学校の中で居づらさは感じにくい。一方、学力が高い生徒と低い生徒が混在して2極化している状況になると、学力が低い生徒がそのことを強く認識してしまい、問題行動を起こしてしまうことも考えられる。富裕層が増えて学力が上がれば授業が落ち着くという単純な構造ではないため、生徒の特徴やその土台となる地域の特徴を把握して、それに合った授業や学級運営を行う必要がある。なお、川崎駅の付近にはこのほかにもアパートの跡地に高層マンションが建設された場所が多い。

番号14の通りは、南河原銀座商店街・ハッピーロードである。かつては店舗が並んだが、現在は閉店したりマンションに変わったりしたものも多い（第6図）。国内の地方都市で見られるシャッター商店街と一見似た景観がみられるが、それとはメカニズムが大きく異なる。地方都市の商店街の場合は、モータリゼーションに伴う店舗の郊外立地や人口減少などにより、来街者が大幅に減少したことが閉店の原因といえるが、東京大都市圏郊外に位置するこの商店



第6図 店舗からマンションへの変化が進むJR川崎駅近くの南河原商店街（2021年9月撮影）

街の場合、店舗を続けるよりもマンションを建設して部屋を売ったり貸したりする方が儲かるといった事情によるものである(牛垣, 2015)。このように、景観的には類似しても場所の違いによって発生メカニズムが異なる地理的事象も数多く存在する。場所の条件や状況を踏まえて事象のメカニズムを考察することで、地理的思考力を養うことができる。なお、この巡検を対面で行った際には、時間の都合でこの場所は通らなかった。授業担当教員がビデオカメラで撮影をするこの方法により、学習時間が短縮され、参加学生の体力的な疲労もそれほど考慮する必要がないため、対象地域に加えることができた。

番号15には、キャノンの研究所が立地する。同社のホームページをみると¹⁾、この川崎事業所では「研究開発部門、生産技術部門、調達統括部門、製品事業部門ほか」がおかれ、同社にとって重要な位置づけにあることが推測される。2000年代までは東芝の工場があった場所であり(第2図)、同じ製造業でも生産機能から研究開発機能に変わったことが分かる。高等学校の地理においても、多摩川沿岸の川崎市や大田区では、工場から研究開発施設に変わっていることを学ぶが(『新詳地理B』帝国書院, 2013年発行)、これが景観や地形図から把握できる。なお、川崎市の産業でみられる工場から研究開発施設へ、重化学工業から先端技術的分野へという動向は、巡検の地である川崎に限ったことではなく、特に先進国においては世界的にみられる産業の動向である。地域学習や野外実習では、対象地域を知ることが重要ではあるが、そこで学んだことがその地域に限ったことであれば、他の機会に活かすことができないために汎用性が低く、興味がもてないと感じるかもしれない。川崎での巡検で学んだことは、他の日本や先進国の工業都市でも当てはまることも多い

ため、川崎における産業の動向から日本や世界の産業の動向を理解することも可能である。このようにとらえることにより、子どもたちの学ぶ意欲も高まると考えられる。

番号16付近の日進町は、一泊2,000円に満たない安宿が立地するいわゆるドヤ街である。日本では、東京の山谷、大阪西成区のあいりん地区、横浜の寿町が三大ドヤ街として有名である。それに比べると日進町の規模は小さいながらも、工業が盛んだった頃には多くの日雇い労働者が寝泊まりしていた。日雇い労働者は、雇用する側からみると経済状況の変動に合わせて雇用者数を変動できる景気の「調整弁」や「緩衝器」(ノックス, 1995)の役割を果たすともいわれており、都心の周辺に位置するドヤ街は都市発展において生じる機能間の矛盾や不都合を調整する役割を担うとも指摘される(佐野, 1990)。2015年5月に火災が発生して11名が亡くなり全国的なニュースとなった宿は、16の番号の少し南に位置する。近年は安宿の利用者が減少しつつあるものの、まちを歩くと、その容貌からここで暮らしていると感じさせるお年寄りやたびたびすれ違う。最近では、市内のデザイナーによって外国人や若者向けのデザインに改装された「日進月歩」という宿があるなど変化がみられるが、コロナ禍が続くために現在の経営状況は厳しいであろう。なお、対面で巡検を行う場合でも、この場所では学生には写真の撮影は不可としており、後に授業担当教員が事前に撮影した写真をデータで送付するようにしている。

番号17との間に位置する川崎市立川崎中学校は、歌手の故・坂本九の出身校で、正門に説明看板が掲げられている。この関係で、JR川崎駅の発車メロディには彼の歌が使われている。

番号17には、商業施設や映画館、結婚式場などからなる複合施設であるラチッタ・デッラが

立地する。この施設名はイタリア語で「小さな街」を意味し、イタリアのヒルタウン（丘の上の街）をモチーフにしており、時折ドラマや映画、CMなどの撮影に使われている。1階にはオープンテラスの飲食店などもあり、開放的で洒落な雰囲気を醸し出している。一方、番号16の日進町のドヤ街はここから300mほどの場所に位置する。一見、華やかな雰囲気です「光」を感じる場所と、暗い雰囲気で「影」を感じる場所とが隣り合っており、今回の巡検の副題「川崎の光と影」が象徴的に表れている。

番号18には、アーケードのある銀柳街という商店街がある。入口に向かって左側にはツルハドラッグが、右側にはディーエスドラッグが、右側2軒先にはマツモトキヨシがあり、ドラッグストアが目につく。このほかにも、飲食店やパチンコ店、カラオケ店など、地域住民向けの商品・サービスを提供する店舗が多い。ここは川崎駅周辺における代表的な商店街であるが、百貨店や世界的な高級ブランドの専門店は見られない。2020年の国勢調査で、川崎市は人口1,539,081人であり、人口数では地方中核都市である広島市（1,201,281人）や仙台市（1,097,196人）を遥はるかに上回る。しかしこれらの地方中核都市の中心商店街では地元の百貨店や世界的な高級ブランド店が立地するのに対して、川崎では見られない。2015年の5月には、川崎市内で唯一の百貨店であったさいか屋が閉店し、一部のフロアで開業する場合を除き、150万都市である川崎市内から百貨店がなくなった。統計をみても、川崎市は人口数に対する小売販売額が政令指定都市の中では最低であり（牛垣, 2020）、区別にみた小売販売額も東京都内の各区に比べると相対的に低い。これは川崎が東京という巨大都市に隣接している地理的位置が関係する。川崎市内の各駅からは、銀座、渋谷、新宿といった繁華街へ乗り換えなく

短時間でアクセスでき、買い回り品を購入する際にはこれらの繁華街を利用する機会が多いためである（牛垣, 2008）。川崎市内の商業の特徴とその背景を理解するには、周辺地域との関係性が重要であり、これは先述の学習指導要領で示される地理的見方・考え方では「位置や分布」や「空間的相互依存作用」にあたる。

番号19の^{いきこ}砂子通りは、旧東海道にあたる。江戸時代、この一帯には東海道のうち日本橋を起点として2番目の宿場町がおかれていた。通りの所々に江戸時代の地名等に関する説明看板や江戸時代の浮世絵が描かれた自動販売機がみられ、歴史のある通りであることが分かる。無料の歴史資料館である東海道かわさき宿交流館もこの通りに立地する。歴史の古い店舗は一見すると少ないが、1913（大正2）年創業の地元では有名な和菓子屋「東照」がある。他の宿場町と同様、江戸時代は間口幅で税金が課せられたために、間口幅が狭く奥行きが長い短冊状の地割の影響を受け、その上に建つ建物は細長いペンシルビルが多い（第7図）。

番号20の手前、現在の六郷橋の南側（川崎側）の橋の麓付近は、江戸時代は旅籠町と呼ばれ、宿の街として知られた。日本地誌研究所（1968）に示された宿駅と宿郷の図によると、神奈川県内の東海道の宿場町の中では、川崎宿



第7図 旧東海道の宿場町にみられる短冊状地割の影響を受けたペンシルビル群（2021年9月撮影）

は最も集落の規模が小さいが、旅籠数は小田原に次いで2番目に多く、当時から夜の街としての性格があったとも考えられる。

番号20は多摩川に架かる六郷橋の南側の橋の麓に位置する。橋の欄干には渡し船のモニュメントがある(第8図)。川崎宿は東海道の宿場町であるが、旅人たちから休む場所がほしいという陳情があり後から開設された宿場町であるため、この渡し船の存在は宿場町・川崎の誕生と深く関わる。このモニュメントはかつてこの地に渡し船が通っていた数少ない痕跡の一つである。

また番号20には、京浜急行大師線が通っている。この路線は、総延長4.3km程のローカル線だが、意外にも関東地方で初めての電車として1899(明治32)年に開通した。同社のホームページをみると、自前で火力発電を設けたことで電気による稼働を可能とし、その余剰電力は周辺に立地した工場で使われた²⁾。これが川崎市において工場立地が進んだ理由の一つとされている。この路線が敷設されたのは、江戸時代に徳川将軍家が4代続けて厄除け詣でに訪れたなどにより多くの庶民が訪れた平間寺(川崎大師)の存在によるものであり、無関係と思える工場と川崎大師という川崎市の要素も、京浜急行大師線という要素が仲介して因果関係でつながっている。

番号21には、かつては東京の吉原に次ぐ国内2番目の規模ともいわれた風俗街・堀之内がある。先述の通り、川崎宿は江戸時代から旅籠が多い夜の街であり、それが堀之内の風俗街につながったともいわれる。周辺には競馬場や競輪場といった娯楽施設もあり、これらが工業という過酷な労働環境下で働く人々にとっての歓楽・娯楽の場として利用された。対面で巡検を行う際には学生とともに歩くのが困難な場所であったが、ビデオカメラを使うことで学生も映

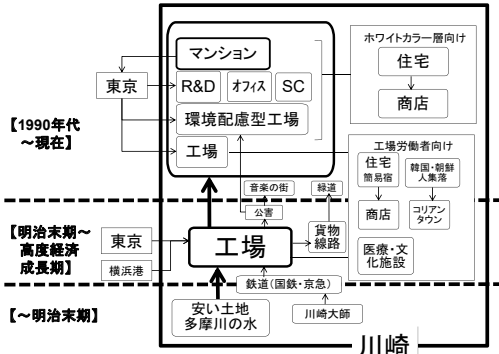


第8図 多摩川に架かる六郷橋の欄干にある渡し船のモニュメント(2021年9月撮影)

像を通してこの場所の雰囲気把握することができる。

最後の番号22はJR川崎駅東口で、ここで本日のまとめの説明をした。本日を通してみてきたように、川崎市は、かつては工場が多数立地し、他の要素も工場との関係で成立したのものも多い。その工場がマンション等になると、他の要素との関係性も変わって地域構造が変化し、ものづくりのための空間から生活のための空間へと変化した。いわゆるブルーカラー層が中心であった居住者もホワイトカラー層が増え、これに伴って立地する店舗も変わってきた。現在の川崎市は、これら新旧の要素が混在する状況にある。川崎市の地理的な特徴や構造を把握するには、工場を中核として他の要素との関わりをみると把握しやすい(第9図)。これは中学校や高等学校の地誌学習で取り入れられている動態地誌的な地域のとらえ方であり、巡検などの地域学習においてもこの地域のとらえ方は有効である(牛垣, 2016a)。

以上が巡検の内容である。学生はレポートを通じて、巡検の内容を踏まえて地域学習や川崎という地域に対する自身の考えをまとめるとともに、教育学部の学生という点を踏まえ、この地域の公立小・中学校における教育上の留意点、またビデオカメラで撮影した動画を用いた学習のメリットとデメリットについて検討した。



第9図 工場を中核としてみた川崎の地域構造とその変化の模式図

IV 巡検動画活用の有効性と課題

Ⅲで示した巡検の様子を撮影した動画を視聴した学生21名に対し、レポート課題の中でビデオカメラを用いた巡検のメリットとデメリット

トについての意見を、自由記述方式で求めた。この回答をまとめたのが第1表である。参加者は現職教員1名のほかは全て教育学部の学生であるため、小・中・高等学校でこの方法を実践する場合も想定して回答するよう求めた。

メリットについては、教員が1人で撮影するために、参加者の体力や体調、歩く速度に左右されないことや、その関係で児童・生徒が教員から近い場合と遠い場合で受ける説明量に差が出ない点を12人が、同じ時間と場所に集まらなくても、自分にとって都合のよい時間で学習できる点を6人が、本来の巡検には及ばないものの、ある程度は地域を歩いた気分になれる、巡検の雰囲気を感じられたりしたという点を6人が、天候に左右されない点を6人が、事故の心配が少なく、学校現場などで行う場合も安全性へ配慮する必要がない点を5人が、聞き

第1表 ビデオカメラで撮影した動画を活用した巡検のメリットとデメリットについての受講学生アンケートの結果 (単位:人)

メリット	
参加者の体力、体調、歩く速度に左右されない。教員からの遠近で説明量に差が出ない。	12
同じ時間と場所に集まらなくても、自分の時間の都合で学習できる。	6
ある程度は地域を歩いた気分になれる。	6
天候に左右されない。	6
説明する景観や資料をカメラで写すため、ポイントが明確。授業のポイントが分かりやすい。	6
何度も見返すことができる。	5
事故の心配が少なく、安全性へ配慮する必要がない。	5
歩道が狭い道路など大人数では訪れにくい場所での実習が可能。	4
ドヤ街や風俗街など実際は訪れにくい場所の様子を見ることができる。	4
時間が短縮されるため多くの観察・説明ポイントを回ることができる。	3
海外など遠方は、全員で訪れるのが難しいが、この方法なら学習できる。	3
移動がない分視聴者は短時間で学習できる。	2
机に座っての作業のためメモに集中できる。疲れない。	2
デメリット	
視覚・聴覚以外(味覚・臭覚・触覚)については体感できず、場所の雰囲気や空気感が分からない。	10
疑問等についてその場で質問ができない。	5
画面をみていると酔う。	3
Wi-Fi環境が悪いと学習できないか、画質が落ちる。	3
視点が固定され誘導的になる。学生自身の気づきや発見が起きにくく、観察力や考える力が育たない。	2
プライバシーの観点で歩行者の顔を写すのが難しく、歩行者の様子が分かりづらい。	2
説明ポイントの間の様子を見ていないため、地域を、面的に、雰囲気を理解することが難しい。	1
画角に制限があり、景色全体をとらえられない。	1

受講学生21名を対象とする。

逃したり見逃したりしても、何度も見返すことができる点を5人が、歩道が狭い道路など大人数では訪れにくい場所での実習が可能な点を4人が、ドヤ街や風俗街など実際には訪れにくい場所の様子をみることができる点を4人が、移動がない分時間が短縮されるために多くの観察・説明ポイントを回る点ができる点を3人が、海外など遠方でも実施可能な点を3人が、移動がない分視聴時間が短時間で済む点を2人が、机に座っての作業になるためメモに集中でき疲れない点を2人がそれぞれあげた。これまでは野外実習を行ううえでの課題として、安全性や時間的な問題があげられていたが、ビデオカメラを使った今回の方法では、これについては大きな問題とはならず、多くのメリットがあると考えた受講学生も多い。

一方で、この方法のデメリットについては、視覚と聴覚以外(味覚・臭覚・触覚)の感覚は使わないため、地域の様子を体感できず、場所の雰囲気を感じにくい点を10人があげた。ビデオカメラを使っての巡検は、資料のみから学ぶよりはるかに地域の様子や巡検の雰囲気が分かるものの、実際に現地へ訪れることには遠く及ばないという反応がみられた。多くの学生は地理学を専門的に学びたいと考えている学生たちであり、現地で学びたいという意欲を強く感じた。地理学や教科としての地理に興味のある学生ほど、ビデオカメラによる方法では物足りないと感じるかもしれない。その他では、疑問等についてその場で質問することができない点を5人があげた。画面を見ていると酔う点を3人があげており、これは全て女子学生であった。今回の方法は著者にとって初めての試みであり、視聴する際の画面のブレについては、それほど意識をせずに撮影をした。景観を映したり資料を映したりと画面が目まぐるしく移動するため、画像酔いをした学生も多かったと考え

られる。撮影者と、説明をしたり資料を提示したりする教員とを分けることができれば、この問題はかなり解消されと考えられるが、1人で撮影をするにしても、可能な限りで注意して撮影をする必要がある。次に、Wi-Fi環境が悪いと学習できないか画質が悪い状態で学習しなければならない点を3人があげた。教員が意図した通りに映像が固定されるために視点が誘導的になるため、メリットにあった通り、教員が意図する点が伝わりやすい反面、学生は受け身になりやすく、学生自身の気づきや発見が起きにくく、観察力や考える力が育たない点を2人があげた。小・中・高等学校における地域学習は、児童・生徒にとって身近な教材を対象とするだけに、主体的に取り組むことが期待されるが、今回の方法は主体性や自発性を促す点においては課題もある。その他では、プライバシーの観点で歩行者の顔をビデオカメラで写すのは難しいため、歩行者の様子が分かりづらい点を2人が、説明ポイントの間の様子を見ていないために地域を面的に理解するのが難しい点を1人が、画角に制限があり景色全体をとらえられない点を1人がそれぞれあげた。いずれも、対面で巡検を行う場合に比べると課題となる点であり、実際に現場へ訪れる本来の巡検の意義を改めて感じさせる。

V おわりに

川崎駅周辺を対象とした今回の巡検のポイントは、以下の通りまとめられる。①巡検では、地域でみられる特定の要素や事象を知るだけでなく、それらの関係性から地域を構造的にとらえることが必要である。②地域の特徴や構造を踏まえて、地域や地域の学校における課題や問題、その解決方法を考える必要がある。③全国的にみられる現象も、場所により発生のメカニ

ズムが異なる場合がある。それを理解するためには、場所の地理的条件を踏まえて現象を理解する必要がある。④地域調査で学んだ事象を、教科書で学んだ事象と照らし合わせて理解する必要がある。⑤巡検を担当する教員は、個々の説明からどのような地理的知識や見方・考え方を修得させることができるかを意識して巡検を行う必要がある。

また、ビデオカメラを使った巡検は初めての試みであり、IVでみられたデメリットも撮影者の配慮や説明、問いかけの仕方次第で解消できるものもある。現地を訪れない方法としてはストリートビューや景観写真を活用する方法などもあり得るが（牛垣，2018）、ストリートビューは視聴できる場所が車道沿いに限定され、写真は視覚以外の情報が得られないことなどの特徴がある。それぞれの方法に長短所があるが、状況によって使い分けることで、現在のコロナ禍の状況下も含めて、何らかの理由で野外実習を実践するのが難しい場合でも、それを完全に代替することはできないものの、ある程度埋め合わせをすることも可能である。できる限り、現場で行う巡検の実施を念頭に置きつつも、野外実習の実践が不可能な場合や補足的に扱う場合など、ビデオカメラを使った巡検動画を活用する今回の方法も、一定の効果が期待できる。

本稿は、2020年10月に開催された日本地理教育学会で発表した内容を骨子としている。

末筆ではございますが、この小論を今年度定年によりご退職される加賀美雅弘先生に献呈させていただきます。

注

1) <https://global.canon/ja/corporate/location.html>（最終閲覧日：2021年9月27日）

2) <https://www.keikyuu.co.jp/history/chronology01.html>（最終閲覧日：2021年9月27日）

文献

新井信幸・大月敏雄・井出 建・杉崎和久（2007）：川崎・戸手四丁目河川敷地区の経年的住環境運営に関する研究。住宅総合研究財団研究論文集，34，pp.101-112.

池 俊介（2012）：地理教育における地域調査の現状と課題。E-journal GEO，7（1），pp.35-42.

井田仁康（2000）：人間形成における野外観察・調査の意義—大学における教職科目の実践を通して—。筑波大学教育学系論集，25（1），pp.71-82.

牛垣雄矢（2008）：川崎市における地域構造の変化—産業と商業地の動向より—。地理誌叢，49（1），pp.16-33.

牛垣雄矢（2015）：商店街と商業活動。大石学・上野和彦・椿 真智子編『小学校社会科を教える本』東京学芸大学出版会，pp.109-113.

牛垣雄矢（2016a）：動態地誌的観点と歴史的観点を取り入れた地域構造図の作成—神奈川県川崎市を事例に—。東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ，67，pp.61-68.

牛垣雄矢（2016b）：学生の街・神田を歩く—大学における野外実習の記録—。学芸地理，72，pp.65-77.

牛垣雄矢（2018）：景観写真で読み解く都市—都市の変化に注目してみよう—。加賀美雅弘・荒井正剛編『景観写真で読み解く地理』古今書院，pp.52-63

牛垣雄矢（2020）：身近な地域の地誌—神奈川県川崎市の地域調査—。矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・牛垣雄矢編『地誌学概論（第2版）』朝倉書店，pp.10-18.

- 風巻 浩 (1998) : 宿河原の砂利採取と朝鮮人.
『神奈川のなかの朝鮮』編集委員会編『神奈川のなかの朝鮮』明石書店, pp.88-98.
- 川崎市 (1997) : 『川崎市史 通史編4上 現代行政・社会』川崎市, 891p.
- 川崎市 (2019) : 『第4期 川崎市ホームレス自立支援実施計画 (平成31 (2019) 年～35 (2023) 年度)』川崎市, 39p.
- 金 侖貞 (2007) : 『多文化共生教育とアイデンティティ』明石書店, 287p.
- 佐野 充 (1990) : 都市内部の構造. 澤田 清編『地理学と社会』東京書籍, pp.147-152.
- 佐野 充・牛垣雄矢 (2009) : 川崎地区. 菅野峰明・佐野 充・谷内 達編『日本の地誌5 首都圏 I』朝倉書店, pp.329-342.
- 高木佑也 (2021) : 首都圏にける高校地理のフィールドワーク実施状況—地理総合を見据えて—. 2021年度日本地理教育学会第71回大会発表要旨集, pp.61-64.
- 日本地誌研究所 (1968) : 『日本地誌8 千葉県・神奈川県』二宮書店, 565p.
- ポール・ノックス著, 小長谷一之訳 (1995) : 『都市社会地理学 下』地人書房, 409p.
- Knox, P. (1987): Urban Social Geography an introduction Second edition. Longman Scientific & Technical, New York.
- 守谷富士彦・大坂 遊・草原和博・宅島大堯・横川知司・村田 翔・小栗優貴・両角遼平・篠田裕文・正出七瀬・鈿 悠介 (2020) : 探究的な学びを支援する社会科地域学習用デジタルコンテンツの開発と活用 (2) —「のん太の学び場」の特性を活かしたオンライン教育の類型化と試行—. 学芸地理, 76, pp.37-53.

Practice of Excursion in the Area Around Kawasaki Station and the Effects and Issues of Using Video Cameras

USHIGAKI Yuya*

Keywords : Excursion, Field study, COVID-19, Online class, Kawasaki

*Department of Geography, Tokyo Gakugei University